

# 萩藩南苑医学校翻譯掛青木周弼

森 川 潤

(受付 2011年10月21日)

## はじめに

青木周弼が萩藩医として在勤するのは、西洋医として萩藩ではじめての藩内居住の藩医に登用される天保10(1839)年2月から文久3(1863)年12月に萩江戸屋横町の自宅で病没するまでの四半世紀のあいだである。それは、アヘン戦争、アメリカ東インド艦隊の来航、馬関海峡における攘夷実行といった萩藩にとっても激動の時代の幕開きの時期である。在勤中、周弼は、西洋医として、同時にオランダ語に堪能な蘭学者として萩藩における蘭学の移植基盤をととのえる。

周弼が萩藩医として在勤する時期は、3期に区分することができる。第1期は、周弼が、新設された萩藩医学校の翻譯掛として原書の会読を担当するかたわら、異賊防禦のための翻譯にたずさわる時期である。第2期は、西洋学所の萌芽である西洋書翻譯御用掛が設置され、異賊防禦御手当掛の所轄になる弘化4(1847)年2月から好生館内に西洋兵学振興のために西洋学所が設置される安政2(1855)年9月までの時期である。この時期には、周弼は萩藩医学校の運営にかかわり、嘉永2(1849)年10月以降の萩藩領全域における牛痘接種の実施により西洋医学の臨床応用性が認知され、学科課程のなかに漢方医学課程のほかに、西洋医学の原書課程と訳書課程を設置する。第3期は、周弼が御側医に任じられ、萩と江戸を往復しはじめる安政2(1855)年8月以降の時期である。藩地の西洋学所における西洋軍事科学の導入が進捗しないために、周弼は、安政5(1858)年3月に江戸桜田藩邸において萩藩に縁故がある蘭学者を結集し、蘭書会読会を開催しはじめる。蘭書会読会は、過激な攘夷運動により孤立化する萩藩の軍事部門をになう蘭学者の発掘の場となる。周弼は、同年10月、御側医のまま好生堂助教兼任を命じられ、ようやく萩藩の医療部門にもどり、萩藩医学校を西洋医学の教育・研究機関に再編成し、幕末期の萩藩医学校の基盤を整備する。

「西洋書は醫者より外に讀まぬものだ」<sup>1)</sup>という時代に、周弼は異賊防禦の職務をゆだねられる。本稿では、第1期において、周弼が、萩藩蘭学のパイオニアとして、どのような蘭学の移植基盤をととのえたか考察する。

## 第1節 藩医登用の経緯

青木周弼は、天保6(1835)年春、健康をそこね、郷里の大島郡和田村にかえり、医業にた

ずさわる。門生もうけいれる。天保8(1837)年7月には、弟の研藏や門生をひきつれ長崎におもむき、1年ほど滞在する。周弼は、天保10(1839)年2月、一代雇の萩藩医に登庸され、年米25俵を支給されることになる。周弼が藩医に登庸される経緯について、門生の日野宗春はつぎのように述べている<sup>2)</sup>。

長崎では周弼の事を神様のやうに思つて居つたので、非常に流行つて居る。彼のやうに流行るのは、誰か、大嶋郡の者でございますと云ふので、御呼寄になつて二十五石で御抱入になつた

しかし、実際には、周弼が長崎におもむくまえから、周弼を萩藩医に登庸しようという動きがみられる。それは、断片的ながら、周弼の伝記に所収される能美洞庵が周弼にあてた天保8(1837)年10月16日付の書簡から窺い知ることができる<sup>3)</sup>。

貴兄一件、若何可<sub>レ</sub>然哉、御帖被<sub>レ</sub>下候後、拙も種々思案工夫ニ罷居候、内少々眞之極密々ニ嗅キ候事有<sub>レ</sub>之、兄醫學拔群之段、物筋ニ相聞へ達、上聞ニ御詮義相成候様子(後略)

全く此舉、拙少しも口を付キ候事ニ而は無<sub>レ</sub>之、坪井共近來頻りに御屋敷内病用ニも参、彼是兄ノ評判、上通致候事哉と相考申候、いつも天道は正直ナル物、貴兄御心底ニ於てハ如何哉とも存候得共、此一件、拙難<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>かり候、事實ニ不<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>舞舞候、尤申入候モ極密事、決而御他言御無用ニ御座候(後略)

周防大島にひきこもった周弼は、旧師能美洞庵に書簡をおくり、今後の身の振り方について相談する。19世紀初頭以来、文化露寇事件、フェートン(Phaeton)号事件といった鎖国体制をゆるがす深刻な問題をなげかける事件があいつぎ、諸藩は海防問題に対応するためにオランダ語に堪能な蘭学者を物色していた。周弼が洞庵に相談をもちかけたのは、「醫學拔群」の周弼もなんらかの打診をうけたからであろう。そのころ、坪井信道は門生の周弼の将来を案じ、しばしば江戸の萩藩邸に診察に出かけ、「評判」どおり周弼の萩藩登庸が実現すると考えている。

書簡はつづく。

勿論無<sub>レ</sub>此上<sub>レ</sub>御面目事に候得共、即今拔擢被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候而は、忽ちいつれぞ御悔宗顯同様ノ事ニ而、此餘研精育英等之御世話ノ樂も出來兼、且隨意ニ漫遊も御調兼候事ト存候故、眞ノ内々拙よりも向々申込<sub>レ</sub>まいか様ノ御詮義カ知り不<sub>レ</sub>申候得共、實ニ壯年修業最中之者ニ候得は、崎陽又ハ京攝等ニ而も勝手ニ遊學も出來兼候事共ニ候得は、此餘上達候事も自ラ調不<sub>レ</sub>申候得は(後略)

しかし、ただちに藩医にむかえられるようなことがあれば、精緻な研究にとりくんだり、門人をそだてたりすることも、修業のために気ままに漫遊したりすることもできなくなる。壮年の修学者が長崎や京攝などに遊学することもできなくなれば、研究もすすまなくなるで

あろう。洞庵は、周弼の登用を上申しながらも、しばらく修業に専念するようすすめる。

この書簡は長崎滞在中の周弼のもとにとどけられる。周弼は、旧師洞庵の思いを付度するかのよう長崎にいた。長崎には、緒方洪庵の姿もあった。たんなる偶然ではないはずである。洪庵は、周弼とおなじころ郷里の備中足守にかえる。洪庵は、その後、大坂におもむき、旧師中天游の思思齋で蘭学を教授していたが、天保7(1836)年2月に長崎へ旅立つ。おなじころ、長崎には、佐藤泰然、林洞海、岡海蔵、三宅良齋などの遊学生がいた。

周弼は、長崎で開業し、同時に蘭書の翻訳にもたずさわる。開業医としては、「治ヲ乞者、門前為<sub>レ</sub>市之中、喚テ神医ト為スニ至ル」といわれる<sup>4)</sup>。周弼は、緒方洪庵、宇和島藩の医師伊東南洋(岡海蔵)とともに、「普刺歇」、すなわちドイツ人内科医プラグゲ(Martin Wilhelm Plagge)がオランダ語であらわした『ベルギー薬局による薬局方』(Receptboek volgens de Pharmacopoe Belgica. Een zakboekje voor genesk. en heelmeeesteren)<sup>5)</sup>の翻訳にたずさわる。1829(文政12)年にオランダで刊行され、長崎に舶載されたばかりのものである。宇田川・坪井の学統では、修業中に蘭書を訳述するのが不文律になっていたようである。宇田川玄真と坪井信道に師事し、かれらの学統を継承すべき周弼は、病により信道塾を去らなければならなくなり、蘭書を翻訳していない。

長崎滞在中、周弼が、石崎、楢林、坂根、工藤などの通詞諸家をたずね、教えをもとめた<sup>6)</sup>のは、蘭書の翻訳のためである。1年ほどの滞在中に『ベルギー薬局による薬局方』の訳稿ができあがり、『袖珍内外方叢』と名づける。

『袖珍内外方叢』は、処方総論、製薬の方法、薬品、処方術について概説する実用的な処方書である<sup>7)</sup>。『袖珍内外方叢』は板行されなかったが、管見では、早稲田大学図書館<sup>8)</sup>、金沢市立玉川図書館近代資料館蒼龍文庫<sup>9)</sup>、滋賀医科大学附属図書館河村文庫<sup>10)</sup>に写本が所蔵される。これらは、いずれも初期の写本であり、序文が欠落している。伊東南洋が校訂したさいに書きくわえた天保15年4月の序文<sup>11)</sup>によれば、未定稿のまま写本が流布する。実用性が評判になったのであろう。

周弼が開業したのは、長崎の滞在費を捻出するためだけではない。むしろ、西洋医薬書を翻訳し、みずからの病院において臨床的な治験を得るためである。周弼は、『袖珍内外方叢』にもとづき、薬剤を処方し、「神医」の称号を得る。周弼が長崎をおとずれたのは、長崎には、清国だけでなく、オランダからさまざまな薬種が舶載されるが、それらの薬種の効能を臨床医として確認しようという意図があったからであろう。

「神医」の風評が藩主につたえられ、それが周弼の藩医登庸につながったとはおもわれない。周弼を藩医に推挙したのは、能美洞庵と坪井信道である。信道は、文政12(1829)年に江戸深川上木場三好町の借家で開業し、安懐堂をひらいたときから、江戸勤番の萩藩士の診療のために近所の萩藩中屋敷に出入りしていた。天保8(1837)年12月、襲封したばかりの藩主<sup>よしちか</sup>慶親

(のち敬親<sup>たかちか</sup>) から慰勞金として銀15枚をおくられる<sup>12)</sup>。天保9(1838)年8月、村田清風が地江戸両仕組掛に任じられると、萩藩からいわゆる囑託医を委嘱される。天保13(1842)年4月には、能美洞庵の「育<sup>はぐくみ</sup>」として正式に萩藩医に補任される。「育」は、「他人を養子とし、又は養子となることで、家督とは関係なく、これによって立身又は縁付などの条件をよくすることを目的とする戸籍関係」を意味する<sup>13)</sup>。信道は、村田清風と私的に親交をむすぶ。清風は、天保4(1833)年8月、葛飾砂村の萩藩別邸の手元役として江戸に着任し、文政7(1824)年に隠居した第10代藩主齊熙<sup>なりひろ</sup>に近侍する。御側医の賀屋恭安や能美友庵も齊熙に随従していた。信道は、萩藩医の能美洞庵とも交遊する。天保9(1838)年8月、清風は地江戸両仕組掛に任じられると、江戸勤番の萩藩士の診療のために信道を萩藩医に登用する。藩医には、国詰と江戸詰の勤番があり、藩内居住が原則であったが、周防国佐波郡の出である斎藤方策が萩藩医として大坂居住をゆるされたのと同様に、信道は江戸居住がみとめられる。

洞庵は、寛政6(1794)年、萩藩医能美友庵の長男として三田尻上町に生まれる<sup>14)</sup>。近所の越氏塾にかよい、吉武江陽のもとで儒学をまなぶ。医術の学習歴は不明であるが、みずから西洋医学をまなんだ形跡はみられない。文政10(1827)年に嫡出雇により御添匙医に任じられる。文政12(1829)年以降、第11代藩主齊元<sup>なりもと</sup>に近侍し、参観にも扈従する。翌13(1830)年に御側医にくわえられ、天保2(1819)年に家督を相続する。齊元の没後、天保8(1837)年には襲封したばかりの第13代藩主慶親の御側医を命じられ、以後、つねに慶親の参観に扈従する。洞庵は、天保10(1839)年2月、信道とともに信道門下の逸材である青木周弼を萩藩医に推挙する。詩文にたけた信道が嘉永元(1848)年に脱稿した「自然斎記」は、洞庵についてつぎのようにしるす<sup>15)</sup>。

寮友能美子艾，山陽之良医也。王父由庵先生，學術精倒，救人之病苦，常若不及。人至，今称之考友庵先生。

余及知之，亦寬厚之長者也。始唱西洋医方於我藩。遠近翕然湊其門。

子艾受業繼志，道益精術益行。今防長之間，洋医之盛，復過列国者，実能美氏之力也。余之固陋，一旦以覇旅之臣，得親近君側，亦由子艾為之先容矣。

洞庵の実父友庵は、第10代藩主齊熙の御側医であり、萩藩ではじめて「蘭方医学」をまなんだといわれる<sup>16)</sup>。西洋医学への憧憬があったのであろう。洞庵も西洋医学に関心をいだき、藩邸に出入りする「三大西洋家」のひとりである信道<sup>17)</sup>と親交をむすぶ。子艾<sup>しがい</sup>、すなわち洞庵は、漢方医にすぎないが、萩藩ではじめて「西洋医方」を唱える。19世紀中葉に萩藩において西洋医学が隆盛をむかえたのは、周弼を藩医に推挽し、周弼にあますところなく才を発揮させた洞庵のおかげである。

洞庵と信道が周弼を萩藩医に登庸するよう推挙したのは、地江戸両仕組掛として天保改革を主導する村田清風である。清風は、天明3(1783)年、日本海岸に面した長門国大津郡三隅

村沢江の萩藩士村田四郎右衛門の長男に生まれる。日本海海岸にはしばしば中国や朝鮮半島の難破船が漂着していたが、19世紀になると、日本近海に欧米の捕鯨船が出没しはじめただけでなく、ロシアをはじめ欧米諸国の船舶が来航し、文化露寇事件、フエトン号事件をひきおこす。いずれも鎖国体制をゆるがす深刻な問題をなげかける事件である。清風は、藩学明倫館に架蔵される『海国兵談』<sup>18)</sup>をひもとき、「本邦ノ武備ハ外寇ヲ防ク術最ト急務トス」という1節に首肯し、全巻を筆写する。

明倫館書物方の清風は、文化露寇事件がおこると、「軍法ニ、我を量り彼を知り而後に戦の勝敗ハ分る事之由」<sup>19)</sup>と考え、江戸在勤の藩士とともに海寇に関する書物を収集する。清風は、国禁の洋書を秘蔵し、平安古<sup>ひあこ</sup>の自邸で関心をいだくものに閲覧させるが、藩内にはオランダ語の原書を解説するものはいない。江戸でも、西洋医書の翻訳が本格化しはじめたばかりである。蘭書を収集したとしても、それらを解説することができなければ、海防策や軍事力の強化策を立案することはできない。諸藩は、海防策や軍事力の強化という観点からオランダ語に堪能な蘭学者をめぐり争奪戦をくりひろげていた。

清風は、天保4(1833)年8月、葛飾砂村の萩藩別邸の手元役として江戸に着任し、文政7(1824)年に隠居した第10代藩主斉熙に近侍する。御側医の賀屋恭安や能美友庵も斉熙に随従していた。清風は、葛飾別邸手元役を免じられ、天保9(1838)年8月、地江戸両仕組掛に任じられる。「仕組」は「家系整理や藩の経済直立しの方法や行為」を意味する<sup>20)</sup>。藩政改革を主導する要職である。清風は、藩政改革に着手すると、懸案であった蘭学者の登用にふみきり、まず坪井信道を萩藩医にむかえる。清風が信道に期待したのは、西洋医としての職務だけではない。

清風は、天保11(1840)年4月、財政再建が進捗しないために辞任を申し入れるが、翌5月にあらたに江戸当役用談役を命じられ、本格的な藩政改革にのりだす。その7月には、3年にわたり練りあげた腹案を「流弊改正意見」としてまとめ、上申する。ただちに天保改革が発令される。改革が本格化する過程で、あいついでアヘン戦争の報がつかえられる。清風は、海防問題を喫緊の課題として改革の一環にくみこむ。

周弼は、天保9(1838)年に長崎から郷里にもどる。萩藩政府からの下命にしたがい、妻タネ、弟研蔵とともに萩城下にうつり、絹織屋町に居をかまえる。タネは、周弼の故郷大島郡和田村の手習い師匠植生善次右衛門の娘である。善右衛門は、下地知行をもたない<sup>む きゅうどおり</sup>無給通以下の毛利家の下級家臣であり<sup>21)</sup>、周弼の手習いの師匠でもある。周弼は、萩の居宅に家塾をひらく。天保11(1840)年8月には、周弼はすでに数名の門生をかかえていた<sup>22)</sup>。そのなかには、江戸からかえり、家塾をひらいたときからの門生もいたであろう。

天保10(1839)年3月、周弼はつぎのような「覺」<sup>23)</sup>を手交され、正式に萩藩医に補任される。

覺

一米二拾五俵

村上安房家來

青木周弼

右醫業宜發向之間有<sub>レ</sub>之候段達

上聞候、依<sub>レ</sub>之、其身一代被<sub>レ</sub>召出<sub>レ</sub>、寺社組支配被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>、右ニ付、御雇料トシテ年々一  
つ書之辻被<sub>レ</sub>下<sub>レ</sub>之候、尤子供之儀は附近之御沙汰ニ而は無<sub>レ</sub>之候事

右之趣を以、當年分より勘渡之可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>沙汰<sub>レ</sub>候、以上

地下医の出である周弼は、「村上安房」の家來、すなわち「育」として藩医に登用される。萩藩で最初の藩内居住の西洋医の藩医である。萩藩は、斎藤方策と坪井信道という西洋医を藩医に登庸したことがあるが、いずれも藩外居住をみとめられ、それぞれ大坂と江戸に居住する。方策は、明和8(1771)年、周防国佐波郡の地下医の家に生まれる。はじめ三田尻の能美友庵のもとで漢方医学をまなぶ<sup>24)</sup>。寛政元(1789)年に大坂におもむき、関西蘭医学の開拓者である小石元俊のもとで漢蘭折衷の医学をまなぶ。その後、小石元俊のすすめにより大槻玄沢の芝蘭堂に入門する。江戸では、宇田川玄真にも師事する<sup>25)</sup>。玄真門下では、周弼の大先輩にあたる。方策は、寛政12(1800)年ころ大坂にもどり、開業し、のちに藍塾をひらく。大坂にもどってから20年たち、50歳になった方策は、文政5(1822)年8月末から10月はじめにかけて、大坂で猖獗をきわめたコレラの治療にあたる。同年秋には『把而翁湮解剖図譜』を訳了する<sup>26)</sup>。『把而翁湮解剖図譜』は、ベルギー・フランドルの解剖学・外科学教授パルファン(Jean Palfin)が1719年に刊行した原著の再版を翻訳したものであり、京都の中屋伊三郎が複製した精巧な銅版の附図40葉を収録する。方策は、文政6(1823)年12月、村田清風と能美友庵の推薦により在坂御雇の萩藩の一代藩医に登用される<sup>27)</sup>。大坂田辺屋橋の蔵屋敷につめる藩士の診療にあたったのであろう。周弼は、おそらく三田尻での漢学修業をおえたのち、「蘭學の修業を志して」上坂し、文政9(1826)年ころまでとどまる<sup>28)</sup>。周弼が大坂に遊学したとすれば、友庵は斎藤方策を紹介したのであろう。

藩医には、世襲的な譜代藩医と一代雇藩医があり、譜代藩医は、嫡子の届をだし、家督を相続すれば、藩医を世襲することができた。非凡な才能がみとめられれば、嫡子雇により補任されることもある。藩医には、侍医と御番医がある。藩主の侍医は、御側医と呼ばれ、御匙医、御添匙医、御鍼医、外科医の区別がある。定員は8名ほどである。奥向きの侍医は、御奥医と呼ばれる<sup>29)</sup>。藩医は、通例、「儒者・医師・絵師・茶道・能狂言師など芸能をもって仕える者」で構成される寺社組<sup>30)</sup>に組み入れられる。侍医は「藩主に近侍し、その側近の職務に服する者」からなる手廻組<sup>31)</sup>に編入される。藩医は、本道医、すなわち内科医、針医、外療医、すなわち外科医、目医、すなわち眼科医、口中医、すなわち歯科医という専門科に

わかれ、さらにそれぞれ流儀がある<sup>32)</sup>。周弼は西洋内科医であるが、道三流兼西洋内科を自称する。道三流は、漢方医学の師である洞庵の流儀であり、日本医学中興の祖と称される曲直瀬正盛(道三)を祖とする漢方医学の一派である。

周弼は、萩藩ではじめての藩内居住の西洋医であるが、一代雇の藩医にすぎない。しかも、萩藩に西洋医学を導入しようと企図する能美洞庵と周弼の西洋医学の師である坪井信道、萩藩の天保改革を主導し、萩藩に西洋軍事学を導入しようとする村田清風、それぞれの思惑が合致し、萩藩にむかえられた藩医である。

## 第2節 医書会読の創始

天保11(1840)年9月4日付で賀屋恭安と能美洞庵が「醫業成立定掛り」に任命される。第10代藩主斉熙の御側医賀屋恭安も、萩藩に医学校を設置しようと機をうかがっていた。恭安は、斉熙の御側医に任じられた文政期のはじめころから、仙台藩の養賢堂、米沢藩の好生堂、徳島藩の医学校、加賀藩の明倫堂、熊本藩の再春館などの諸藩の医学校について調べていた。「賀屋恭安手摺之写」には、米沢藩の好生堂について、つぎのようにしるされる<sup>33)</sup>。

医学校ヲ好生堂ト云フ、興讓館ト一境内ニナラヘ建タリ、是ハ近年ニ出来タルナリ、医師一人学務ヲ督ス、是ヲ總裁ト云フ、其次ヲ訓導ト云フ、三人アリ、其次ヲ助正ト云フ、四人アリ、何レモ定居ノ者ナシ、諸生モ通ヒナリ、傷寒論金匱ヲ主トシテ、表靈、本草、鍼科、産科、整骨、眼科ナド皆會業アリ、總裁ハ階級侍医ノ次座ナリ、侯命有テ、國中医生ミナ出テ學ハシム、總裁ヨリ許スニアラサレハ、封内ニテ漫ニ医療ヲ行フヲ得サルナリ

恭安は、安永9(1780)年に萩藩医賀屋玄張貞通の長男に生まれる<sup>34)</sup>。洞庵より14歳年長である。寛政9(1797)年に明倫館にはいり、繁沢豊城はんざわほうじょうに儒学をまなぶ。享和3(1803)年に京にのぼり、古医方の旗頭である吉益東洞のあとをついだ南涯に師事する。のちに「吉門の十哲」の筆頭にあげられ、南涯の代稽古をつとめる。恭安は「防長を代表する天下の名医」である。文化11(1814)年に御添匙医に任じられ、文政3(1820)年には藩主斉熙の御側医に任用される。文政7(1824)年2月に斉熙が隠居すると、村田清風、能美友庵などとともに随従する。恭安は、斉熙の没後、夫人の法鏡院の侍医として麻布藩邸にうつりすむ。江戸在勤中には、大槻玄沢、塙保己一、安積良斎などの文人墨客と親交をむすんだといわれる。天保9(1838)年には萩にもどり、藩主慶親の御側医の能美洞庵にはかり、連名で医書の会読をはじめたいと上申する。

上申が聴許されたために、賀屋恭庵と能美洞庵は連署し、つぎのようにかがう<sup>35)</sup>。藩政府からの回答の部分は、付箋にしるされたものであろう。付箋にしるされた回答には、便宜上、[]を付した。

演説覺

[本書、稽古場の儀は當分南苑相應之場所貸渡被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候事]

[但醫學館之儀は追而詮議可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候事]

一醫業成立之爲ニは、醫學校造立可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>哉、夫迄之処、當分相應之明キ場所ニ  
而も御見渡を以、稽古場御定可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下哉

[本書、申出相成候ハ、沙汰可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候事]

一成立之儀は、稽古盛り壯年之者之吏ニ候へ共、連々申合御役懸り又は年老之者も折々  
致<sub>レ</sub>出席<sub>レ</sub>候様被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候ハ、壯年引立ニも可<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>哉

[本書、申出之通被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>二候事]

一會日致<sub>レ</sub>出勤<sub>レ</sub>候面々、面着相調差出候様被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候ハ、勤惰も相分り、一統之勤  
ニも可<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>哉

[本書、稽古場懸り役人之儀は御茶屋番兼帯被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>、其外申出之通被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候事]

一多人数之事ニ候へは、稽古場懸り之役人衆、被<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>、火用心其外御取メリ被<sub>レ</sub>仰  
付<sub>レ</sub>、小使之者ニ而も被<sub>レ</sub>差出<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下哉

右私共兩人、此度、醫業成立定懸り被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候付、御詮議之上、追々御勿昏被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>  
被<sub>レ</sub>下候、此外、追々御問出申上候趣も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之候事

ふたりは、第 1 に、「醫業成立」、すなわち医業を専門的な職業として確立するためには、  
医学校を新築しなければならないが、それまでは、当分のあいだ、適当な場所をさがし、稽  
古場をさだめるようもとめる。それにたいして、藩政府は南苑の御茶屋内の空室を稽古場と  
して貸与すると回答する。萩藩内の交通の要衝には、御茶屋がもうけられ、藩主の参勤交代  
や藩内巡視、一族の旅行、九州諸大名や幕府役人の宿泊に供せられる。南苑の御茶屋は、の  
ちに八丁御殿と呼ばれる<sup>36)</sup>。もともと藩主の側室やその子どもが利用していたものである。  
第 2 に、「醫業成立」のためには稽古盛りの壯年のものが出席することになるが、老輩にも  
ときどき出席するよう命じられれば、壯年のものをひきたてることになる。第 3 に、会読日  
に出勤するものに接見するよう命じられれば、勤惰の様子がわかり、参会者のはげみになる。  
ふたつの稟請は許可される。第 4 に、会読には多数のものが参加するために、稽古掛の役人  
を任命し、火の用心などにあたらせ、小使も差し遣わせてほしい。藩政府の回答は、稽古掛  
の役人は御茶屋番との兼務とし、小使も差し遣わす、というものである。さいごに、ふた  
りの医業成立定掛は、今後、上申する機会がふえ<sup>はながみ</sup>として、「勿昏」、すなわち稟請文書に付箋  
をつけ、回答するよう要請する。その結果、[] の回答が付箋にしるされ、「子九月十一日」  
付で、能美洞庵に下付される。

恭安と洞庵は、会読の開始にむけ、教員の人選と会読用書の選定をすすめる。9月17日以  
降、熊野玄宿、李家尚謙、大中益甫、馬屋原大庵、赤川玄成、烏田良岱が「醫學掛り」、青

木周弼が「翻譯掛り」、河村養信が「本草掛り」、和田昌景が「眼療掛り」に任命される<sup>37)</sup>。  
ふたりの医業成立定掛は、教員と会読用書のリストを添付し、つぎのようにかがう<sup>38)</sup>。

覺

[廉々本書之通、尤醫學掛之者、御用湊又は病氣等之節は會人数申合、會集可<sub>レ</sub>仕<sub>レ</sub>候事]

一別紙之通、會讀被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候ハ、來ル廿二日<sub>ニ</sub>會始可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>哉

一會日、八ツ時揃ニ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>哉

一醫學掛り之者、御用湊又は病氣等之節ハ當日休會ニ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>哉

九月

第1に、教員と会読用書について承認されれば、9月22日に会読をはじめめる。第2に、会読の開始時刻はすべて「八ツ時」にそろえる。第3に、会読の主宰者が職務や病気などにより参会できないばあいには休会にする。ふたつの伺いはみとめられるが、会読の主宰者が参会できないばあいには、会読参加者が申し合わせ、参会するよう下令される。「子九月廿一日」付で、付箋を付した上申書が洞庵に下付される。御側医の洞庵を実質的な主宰者とし、翌22日、萩八丁南苑の御茶屋内の空室において医書の会読がはじまる。当初、萩藩医学校は南苑医学所と呼ばれる。

会読は、荻生徂徠が儒学の教授・学習方法として導入したといわれる<sup>39)</sup>。徂徠は、「師教よりは朋友の切磋にて知見を博め學問は進候事に候。(中略)朋友に交り門風に染候事は第一の事に候」<sup>40)</sup>と考へ、學問にこころざす塾生がたがいに自由な議論のなかで競いあい、切磋するために会読という協同学習を考案する。徂徠が導入した会読は、のちに萩藩学明倫館の第2代学頭になる徂徠の高弟山県周南にうけつがれる。周南から永富独嘯庵にうけつがれ、その門人亀井南冥にうけつがれる。その後、南冥の門人広瀬淡窓、さらに蘭学者の坪井信道、その門生にもうけつがれる<sup>41)</sup>。萩藩では、山県周南以来、明倫館に経書の会読の伝統がうけつがれ、周弼により原書の会読が導入される。

会読は、「三の日」、あるいは「五の日」といった定日におこなわれる。「醫學掛り」、「翻譯掛り」、「本草掛り」、「眼療掛り」は、それぞれ「素問」、「うんえき瘟疫論」、「十四經」、「傷寒論」、「醫療正始」、「外科必讀」、「翻譯」、「本草皓蒙」、「眼科新書」の会読を担当する。「素問」、「瘟疫論」、「十四經」、「傷寒論」、「本草皓蒙」は、漢方医書であり、それぞれ本道医・道三流の漢方医である熊野玄宿、李家尚謙、大中益甫、馬屋原大庵、河村養信が担当する。漢方医書だけでなく、「醫療正始」、「外科必讀」、「眼科新書」といった西洋医書の訳書も採用され、それぞれ赤川玄成、烏田良岱、和田昌景が担当する。周弼は「翻譯」、すなわち蘭書の会読を担当する<sup>42)</sup>。

西洋医書の訳書を担当する藩医は、西洋医学をまなんだ経歴がある。赤川玄成は、文化元

(1804)年、藩医赤川玄樸の子として萩に生まれる<sup>43)</sup>。天保6(1835)年閏7月、嫡出雇により御添匙医に任じられる。専門は本道、流儀は人見法印慶安伝であるが、『医療正始』を講じる。訳書であるにしても、西洋医学を学習した経験がなければ、会読を主宰することはできない。修学歴はあきらかではない。天保13(1842)年2月には、「三日」には「瘟疫論」、「七日」には「内科撰要」を担当する。

烏田良岱は、文化元(1804)年5月、山根意休の四男に生まれる<sup>44)</sup>。江戸に遊学し、佐藤泰然、高野長英に師事したといわれる。天保年間に、萩藩医烏田静庵が隠居したのにもない養子にむかえられる。医書会読がはじまると、医学掛として「外科必読」を担当する。

和田昌景は、安永9(1780)年に周防国熊毛郡8代村の地下医藤本玄盛の長男に生まれる<sup>45)</sup>。医業をつぐために萩で医術をまなぶ。文化14(1817)年に萩藩医和田文景の養子にむかえられる。文政7(1824)年、養父の死没により家督相続し、文政9(1826)年には本道医ではなく、外療医、すなわち外科医として藩医に任じられる。昌景は、天保9(1838)年12月には、御鍼役として藩主慶親の侍医を命じられる。昌景の専門科名は「外療医阿蘭陀流眼科兼帯吉岡流・身柄一代針治兼田辺流」である。昌景は、医学所では「眼療掛」として毎月21日に「眼科新書」の会読を主宰する。昌景は、文政元(1818)年から同7年のあいだ、あるいは文政10(1827)年から同11年11月までのあいだに、幕府医官の土生玄碩に師事したといわれる<sup>46)</sup>。玄碩は、シーボルト事件に連座し、文政11(1828)年11月に改易・禁固に処せられる。昌景は、文政10(1826)年、同12年、天保4(1833)年、同6(1835)年に藩主参観に扈従し、江戸におもむく。昌景が「阿蘭陀流眼科」を名のるのは、江戸在勤中に玄碩に師事したからであろう。昌景は、玄碩門下の先輩である杉田立卿が梓行した『眼科新書』を萩医学校における会読のテキストとしてつかう。なお、木戸孝允は和田昌景の長男である。

西洋医学を担当する教授スタッフのなかでも、オランダ語を習得し、蘭書を訳述したことがあるのは、青木周弼だけである。しかも、医学所の西洋医学のテキストは、周弼が江戸遊学中に師事した宇田川・坪井の学統につらなる蘭学者が訳述したか、関与したものである。

『医療正始』の原著は、「昆斯骨夫」、すなわちオーストリア人医学者ビショッフ (Iganx Rudolph Bischoff) があらわした『臨床医学基礎』である。ビショッフは、1747年8月にオーバー・オーストリアのクレムスミュンスターに生まれる。1813年にはプラハの外科医院 (medizinische Klinik für Wundärzte) の教授となり、1826年にはウィーンに招聘され、ヨーゼフ医科アカデミー (medizinisch-chirurgische Josepfs-Akademie) 教授に就任する。ビショッフは、1823年から1825年にかけて『臨床医学基礎』 (Grundsätze der praktischen Heilkunde durch Krankheitsfälle erläutert: zum Gebrauche für Wundärzte), 1829年には『病院における治療方法の記述』 (Darstellung der Heilungsmethode in der medicinischen Klinik) を刊行する<sup>47)</sup>。『臨床医学基礎』は、第1巻『外科医のための症例解説』 (Krankheitsfälle erläutert:

zum Gebrauche für Wundärzte, Prag 1822), 第2巻第1部『外科医のための胸部および下腹部の炎症説の症例解説』(Die Lehre von den Entzündungen der Brust und des Unterleibes durch Krankheitsfälle erläutert: zum Gebrauche für Wundärzte, Prag 1823), 第2巻第2部『頭部および頸部の器官の炎症説の症例解説——とりわけ幼年期の急性脳水腫および皮膚性ジフテリアを念慮して』(Die Lehre von den Entzündungen der Organe des Kopfes und des Halses durch Krankheitsfälle erläutert: mit besonderer Rücksicht auf die hitzige Gehirnwassersucht des kindlichen Alters und auf die hütige Bräune, Prag 1825)の3冊からなる。

『臨床医学基礎』は、「越面宝幾」, すなわちオランダ人エルディック (Cornelis van Eldik) により蘭訳され, 蘭訳書 (Grondbeginsels der praktische Geneeskunde) が長崎に舶載される。京都大学附属図書館富士川文庫所蔵の『医療正始附醫院類案』24巻3冊<sup>48)</sup>は, 蘭訳書から重訳され, 3巻単位で板行される。巻之一から巻之三までが「一篇」, 巻之四から巻之六までが「二篇」という具合につづき, 巻之二十二から巻之二十四までが最後の「八篇」である。各篇の最初の巻の見返しには, 「冲齊伊東先生譯本」, 「象先堂蔵」, 「青藜閣發兌」とともに, 文字を版木に刻みおえた「開雕<sup>かいちよう</sup>」の年, すなわち板行年もしるされる。見返しの反対側には, 3巻分の「標目」, すなわち目次が付される。板行年と各篇の巻構成は, つぎのとおりである。

- 一篇 天保六年孟冬 卷之一 (開雕年・標目)・二・三
- 二篇 天保七年孟夏 卷之四 (開雕年・標目)・五・六
- 三篇 天保八年孟夏 卷之七 (開雕年・標目)・八・九
- 四篇 天保九年孟夏 卷之十 (開雕年・標目)・十一・十二
- 五篇 安政五年立春 卷之十三 (開雕年・標目)・十四・十五
- 六篇 弘化三年初秋 卷之十六 (開雕年・標目)・十七・十八
- 七篇 弘化四年丁未 卷之十九 (開雕年・標目)・二十・二十一
- 八篇 安政五年立春 卷之二十二 (開雕年・標目)・二十三・二十四

天保6(1835)年に最初的一篇3巻が板行されるが, 安政5(1858)年春に全巻がそろそろまで20年あまりの歳月がついやされる。天保6(1835)年の段階で訳了していたのではなく, 3巻分の訳稿がそろった段階で板行されたことがうかがわれる。萩藩医学校が開校したときには, 一篇から四篇までの12巻だけが板行されていた。

奥付にも「伊東玄朴譯本」としるされるが, 実際には阮甫が訳述したものであるといわれる<sup>49)</sup>。杉田玄白が蘭書を「大部の物といへども力の及へる程ハ費へを厭ず購ひ求め」た<sup>50)</sup>ように, 玄朴も高価な蘭書を購求していた。阮甫は, 天保5(1843)年に江戸八丁堀に開院するが, 火災にあい, 病院だけでなく, 高価な蘭書までうしなう<sup>51)</sup>。玄朴は, 「翻訳が飯より好き

な」阮甫に「いくばくかの金子<sup>きんす</sup>を与え」、象先堂に架蔵される『臨床医学基礎』を訳させ、自分の名義で訳書を版行する<sup>52)</sup>。阮甫は、文政5(1822)年に宇田川玄真の風雲堂に入門し、2年先輩の坪井信道などと競い合っていたが、天保10(1839)年に幕府天文方の蛮書和解御用に出仕したころから、医学の研究からとおごかる。地理書、歴史書、自然科学書などの訳述のあいまに、それまでに手がけた医書の訳述にたずさわったために、『醫療正始』の板行に歳月を要する。なお、周弼は阮甫とともに『醫院類案』を訳述するが、板行されてはいない。

『外科必讀』は、6冊13巻125篇からなり、「外科的治療を必要とするあらゆる疾患を網羅し、総論を掲げた後、各疾患を病類によって分ち、更に各症の部位に従って分け、各々の原因、証候、診断、治療等に就て詳細に述べたるもの」である<sup>53)</sup>。原本については、「プレック又はゲッセル」の著述ではないかと推測されていた<sup>54)</sup>。それは、後述のプレックの原著がオランダ人外科医ゲッセル (David van Gesscher) により4冊蘭訳され、長崎に舶載されたものが数種類訳述されているからである。しかし、『洋学史事典』によれば、『外科必読』はドイツ人外科医チットマン (A. Tittmann) が1800年から1802年にかけてあらわした『外科講義録』 (Lehrbuch der Chirurgie zu Vorlesungen) をオランダ人外科医ホウト (Tjalling van der Hout) が蘭訳したものである<sup>55)</sup>。箕作阮甫は、天保元(1830)年には『外科講義録』を訳する<sup>56)</sup>が、『外科必讀』と題し、板行するのは、天保4(1833)年、すなわち『醫療正始』1篇が梓行される前々年である。

『眼科新書』は、杉田玄白と後妻伊与のあいだにうまれた立卿<sup>りゅうけい</sup>が文化12(1815)年に梓行した西洋眼科書である。原著は、ウィーンの陸軍軍医学校ヨーゼフ・アカデミー (Josephinische Medizinisch-Chirurgische Akademie) 教官のプレック (Joseph Jacob Plenck) が1777年にラテン語版 “Doctorina de oculorum” として、1778年にドイツ語版 “Lehre von der Augenkrankheiten” として刊行した『眼病学』である<sup>57)</sup>。プレックの医学書は、18世紀後半に相次いでオランダ語に翻訳され、出版される<sup>58)</sup>。プレックは、ヨーロッパでは、皮膚病の分類をこころみた皮膚科学者として知られる<sup>59)</sup>。『眼病学』は、1787年にロッテルダムの眼科開業医のプロイス (Martinus Pruijs) により蘭訳され (Verhandeling over de Oogziekten)、刊行される。立卿は、坪井塾に入門するが、父玄白のすすめにしたがい、眼科学をまなび、幕府医官の土生玄碩にも師事する。日本に舶載された『眼病学』のオランダ語版が寛政11(1799)年に宇田川玄真により下訳され、それが未定稿のまま『泰西眼科全書』と題する写本として流布していた。「榛齊譯之。然多事鞅掌。不遑脱稿」<sup>60)</sup>、すなわち玄真が多忙多端のために脱稿することができないために、「和蘭譯官馬君。穀里」、すなわち蕃書和解御用の同僚である馬場佐十郎の助言をうけながら、立卿が増補・改訂し、文化12(1815)年に『和蘭眼科全書』として梓行する。同年、『眼科新書』に改題する。構成は、眉病、睫毛病、眼瞼病、涙管病、白膜病、角膜病、眼球病、蒲桃膜病、水様液病、水晶液病、硝子液病、網膜病など

12編からなり、全体で118の症例をとりあげる。『眼科新書』は、「眞ニ西洋眼科ノ真相ヲ、我が邦ノ醫界ニ紹介シタル」ものである<sup>61)</sup>。1812年にウィーン大学に西洋ではじめての眼科学教室が創設される<sup>62)</sup>。それまでは眼科学は耳科、齒科などとともに外科学の一部門とみなされていた。日本では、中国元代に医方九科のなかに「眼科」が独立したのをうけ、「眼科」が「鼻・口・齒科」から独立し、南北朝の時代に馬島清眼<sup>まじませいがん</sup>という「眼科専門ノ醫家」があらわれる<sup>63)</sup>。馬島流眼科は代々うけつがれるが、諸流派も出現する。

周弼は、天保13(1842)年3月、赤川玄成が江戸勤番のために医学所を辞任したために、玄成の講座をうけつぎ、旧師である宇田川玄真が校注をほどこした『内科撰要』を講じる。『内科撰要』の原著は、オランダ人内科医ゴルテル (Johannes de Gorter) が1744年に刊行した『精選医学、大多数の内科疾患に関する短い手引、海戦や野戦に従軍したり、またはその他の場合にこのような病気を取扱う必要を生じた外科医が利用するために』(Gezuiverde Geneeskunst of kort onderwys der meeste inwendige ziekten; ten Nutte van chirurgyns, die ter zee of velde dienende, of in andere amstedigheden, zig genoodzaakt vinden dusdanige ziekten te behandelen)である<sup>64)</sup>。宇田川玄随は、蘭学をこころざしてから5年後の天明4(1784)年に桂川甫周のすすめにより『精選医学』の翻訳にとりかかり、寛政4(1792)年に訳了する。その翌年から刊行がはじまり、玄随の没後、文化7(1810)年に全18巻の刊行がおわる。その間、養嗣子の玄真により校注がほどこされ、宇田川二代の門生である藤井方亭があらたに入手した増補版の9篇を翻訳したものもくわえられる<sup>65)</sup>。『内科撰要』は、「發無定處ノ病ヲ始トシ、諸器臟系統ノ疾病ヲ説キテ、皮膚ノ病ニ終」り、疾病ごとに「先ツソノ大較ヲ擧ゲ、次デ病原・區別・診候ヲ説キ、終ニ治法ヲ論」ずる<sup>66)</sup>。それは、「本邦内科書新訳ノ始」である<sup>67)</sup>だけでなく、「江戸の本格的な西洋医学書の翻訳」に先鞭をつけたものでもある<sup>68)</sup>。

萩藩医学校における西洋医学の会読用書は、宇田川・坪井の学統によって訳述されたものである。能美洞庵は、西洋医学の萩藩への導入を企図するが、みずから本格的に西洋医学をまなんだ経歴はない。西洋医学の課程編成については、周弼にゆだね、内科、外科、眼科テキストを選定させ、担当スタッフを選んだことが窺われる。そのために、西洋医学の学科編成には宇田川・坪井の学統を継承する周弼の立場が鮮明にあらわれる。

萩藩医学校では、天保11(1840)年9月22日に医書の会読がはじまる。この医学校は、もともと藩医の子弟のための教育施設であった。翌天保12(1841)年1月、医業成立定掛は連署し、「御醫師中之門人、陪臣、地下、町醫、其外他國生ニ而も南苑罷出、修業仕度相願侯輩を出席御免可被仰付哉」と願いでる<sup>69)</sup>。「他國人は何某様御家来、又は何某様御領分町醫等之訳、且陪臣之儀は主人之姓名を書記、兼而御用所、御聞届之上、罷出侯様被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>侯事」という回答を得る。所属身分を明確にすることを条件として、藩医の門生、陪臣医、地下医、町医、他國生にも門戸がひらかれる。萩藩領で医業をいとなもうとするものは、従来、自宅で父兄

のもとで医術を修業するか、他の医師につくか、他国に師家をもとめるか、いずれかであった。今後は、萩藩医学校の教授スタッフがいとなむ家塾で一定レベルの予備知識をたくわえるまで修業し、師家の推薦により入学をゆるされる。他藩のものも入学をゆるされ、医術修業のために自宅または寄寓先の師家の家から、医学所にかようことになる。しかし、のちに地下医や陪臣医への門戸開放をめぐる議論がくりかえされたことから窺えるとおりに、萩藩医学校は、いつしか藩医の子弟のための医学校にもどる。

周弼は、開校当初、毎月11日に「翻訳」を担当し、「蘭書を講説せり」<sup>70)</sup>。いわゆる外書講読である。しかし、周弼の「翻訳」に参加するものはいなかったようである。周弼は、門生の入学がみとめられると、天保12(1841)年2月、東条英庵、青木研蔵など15名の門生をリストアップし、「右私方入塾之諸生ニ御座候南苑稽古所爲修業罷出度相頼候此段御聞届可被下候事」と願いで、許可をえる<sup>71)</sup>。門生のなかには、「松平讃岐守様御家來」、「東大寺御家來」、「大坂町醫」といった肩書きもみられる。周弼の15名の門生は、周弼の居宅か自宅から医学所にかよう。周弼の「翻訳」に参加するのは、周弼のもとでオランダ語を習得したか、オランダ語を学習する門生だけである。当時の萩藩では、周弼は蘭学者の唯一の供給源である。

萩藩医学校は、蔵書がとほしく、会読は担当藩医の私蔵書によってはじめられる。そこで、まず蔵書構築に意をそそがなければならなかった。周弼は、萩藩医学校における「翻訳」を担当するだけでなく、藩命により「蘭書シヨメール」の翻訳にもたずさわる。「蘭書シヨメール」は、萩の豪商熊谷五右衛門から借りうけたものである<sup>72)</sup>。萩藩医学校は、天保13(1842)年8月、周弼が所有する「エヘイ分理書」9冊を16両2歩で買い上げる<sup>73)</sup>。オランダのライデン大学教授イペイ (Adolf Ypei) が、イギリス人化学者ヘンリー (William Henry) が著した『化学概略』(An Epitome of Chemistry) をオランダ語訳した『初心愛好家のための化学』(Chemie voor Beginnende Liefhebbers) であろうか。宇田川榕庵の『舎密開宗』は、イペイの化学書を基礎としたものである<sup>74)</sup>。同年12月、萩町人の津田六郎以下3名がつぎのような書籍を「醫學稽古場」に献納する<sup>75)</sup>。

醫宗金鑑	四拾八冊帙共
傷寒論集成	拾冊
金匱輯義	拾冊
字典	四拾一冊
字林玉篇	一冊
本草綱目	三拾九冊
救荒本草	六冊
本草啓蒙	二拾七冊
和蘭藥鏡	拾八冊

名物考	四拾五冊
醫療正始	二拾冊
氣海觀瀾	一冊
瘟疫論	二冊

このうち、『和蘭藥鏡』、『名物考』、『醫療正始』は西洋医薬書の訳書であり、『氣海觀瀾』は日本で最初の西洋物理学書である。『和蘭藥鏡』は、宇田川玄真がオランダの本草書や薬説20部あまりから抄訳し、和漢の本草学の諸説をもとに和漢のものに同定した品類の形状、効能、治験、製剤などをまとめたものである<sup>76)</sup>。文政3(1820)年に初編3巻を公刊する。のちに養子榕菴が改訂増補し、文政11(1828)年から天保6(1835)年にかけて『新訂増補和蘭藥鏡』を出版する。『和蘭藥鏡』は、もはやたんなる翻訳ではなく、臨床に応用するために西洋のいくつかの医薬書から訳出・援用したものである。寄贈されたのは『新訂増補和蘭藥鏡』である。『名物考』は、宇田川玄真が訳述したものを養子の榕菴が校補し、文政5(1822)年から文政8(1825)年にかけて板行した『遠西医方名物考』である。「金石土鹽及ビ動物ニ屬スル品物」<sup>77)</sup>、すなわち西洋の「鉱物由来、動物由来の医薬」<sup>78)</sup>をイロハ順に配列し、薬物の産地、形状、製薬法、調剤法、薬効、用法などを記載したものである。『氣海觀瀾』は、青地林宗が「遠西理科書」を渉猟し<sup>79)</sup>、訳述編集した物理学書である。文政8(1825)年に脱稿し、文政10(1827)年に版行される。萩城下で原書を調達するのは限界がある。

医業成立定掛の稟請と会読科目から、医業成立定掛がどのような医学校を構想していたか窺い知ることができる。第1に、萩藩医学校は医業を専門的な職業として確立することを課題とする。萩南苑御茶屋の空き室で会読をはじめめるが、当初から校地と校舎をもつ医学校に生まれかわる計画であった。第2に、指導的な立場にある藩医のあいだでは、藩医の再教育の必要性が認識されていた。周弼が藩医に登用されたころには、藩医は80家ほどあったが、「あまり出来ぬ人でありながら家名だけ嗣いでゐる者」が多く<sup>80)</sup>、しかも「一家学ヲ主張シ、虚傲偏執ノ弊」<sup>81)</sup>が生まれていた。しかし、参会者がすくなかったのであろう。藩政府は、医業成立定掛の稟請に応じ、壮年の藩医に参会するよう指令するが、強制力をもたない。藩医の同僚が会主となる会読に会読生として参会することに抵抗がつよかったとおもわれる。やがて、藩医の門生、陪臣医、地下医、町医、他国生にも開放される。

第3に、地下医や町医を受け入れるのは、医業成立定掛が、米沢藩医学校のように、藩命により藩領内のすべての医者萩藩医学校で研修させ、医業登録させようという構想をいっていたからである。藩領で医業にたずさわるものを萩藩医学校に登録させ、一元的に管理すれば、庸医の横行をふせぐだけでなく、医業従事者の水準をたもち、さらに質的向上をはかることもできる。

第4に、会読は定日、定刻におこなわれる。しかし、会読用書に関していえば、「漢學を

重もにして、チョコチョコ西洋流を入れて」<sup>82)</sup>といわれるように、漢方医書のなかに西洋医書がまぜこまれる。西洋医書を担当する教授スタッフのなかでも、オランダ語を習得し、蘭書を訳述したことがあるのは、青木周弼だけである。しかも、萩藩医学校における西洋医学の会読用書は、周弼が江戸遊学中に師事した宇田川・坪井の学統につらなる蘭学者が訳述したか、関与したものである。萩藩医学校を主宰する洞庵は、萩藩に西洋医学を導入するために、周弼を藩医に推挙するが、みずからは道三流本道医にすぎない。西洋医学の課程編成については、周弼にゆだね、内科、外科、眼科テキストを選定させ、担当スタッフを選んだことが窺われる。しかし、周弼が萩藩医学校の運営にかかわることはない。

### 第 3 節 「異賊防禦」対策

周弼は、藩医として藩士の診療にあたる。同時に、萩藩医学校における「翻訳」を担当するだけでなく、藩命により「蘭書シヨメール」の翻訳にもたずさわる。「蘭書シヨメール」は、萩の豪商熊谷五右衛門から借りうけたものである<sup>83)</sup>。「蘭書シヨメール」は、フランスの聖職者シヨメール (Noël Chomel) が編纂し、1709年に刊行した 2 冊本の『家政辞典』(Dictionaire économique) をオランダのレーワルデン (Leeuwarden) の印刷出版業者シャルモ (J. A. de Chalmot) が増補改訂し、蘭訳した『家庭百科辞書』(Huishoudelijk woordenboek) 第 2 版 (1778年刊) である。

文化 8 (1811)年に幕府天文方の一局としてもうけられた蛮書和解御用は、外交文書の翻訳のかたわら、蘭訳本の『家庭百科辞書』の翻訳をはじめ。開設時には馬場佐十郎と大槻玄沢が訳員を命じられるが、文化 10 (1813)年には宇田川玄真がくわり、以後、著名な蘭学者が動員される。『家庭百科辞書』の翻訳は、天保 11 (1840)年までつづけられ、順次、訳稿が幕府に献上される。訳稿は、『厚生新編』と題し、70巻におよぶ。しかし、訳稿は公開されることはなかった。

周弼は、どのような項目の翻訳にたずさわったであろうか。弘化元 (1844)年 12月 29日付で藩医の竹田庸伯がつぎのような上申書を提出する<sup>84)</sup>。

右於<sub>レ</sub>醫學所、青木周弼引受之會業、先達而<sub>レ</sub>硝石又は銅之類翻譯仕來矣處、元來大部之書物、其上不容易儀ニ而、所詮埒明不<sub>レ</sub>申、周弼也も世上病用忙敷、彼是一人ニ而は運兼、甚<sub>レ</sub>以奉<sub>レ</sub>恐入<sub>レ</sub>矣、右ニ付庸伯事、兼々西洋學心掛、源書相學居矣也ニ付、何卒會業手傳ト<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>差出一被<sub>レ</sub>下矣ハ、申談奉<sub>レ</sub>遂其節度段周弼<sub>レ</sub>申出矣間、格別之御心入を以被<sub>レ</sub>開召届宜御詮議奉<sub>レ</sub>願矣事

庸伯は、文化 8 (1811)年、萩藩医 (鍼科) 松島正悦の次男に生まれる<sup>85)</sup>。天保 6 (1835)年 4月に竹田本家から 50石の分知をうけ、竹田祐伯をな。天保 7 (1836)年春、遊学の藩許をえ、京都に遊学する。翌 8年 11月に大坂の高良齋のもとで蘭学を修業し、帰藩後も「源書」

を繙読していた。嘉永3(1850)年ころ、すでに御添匙医格に任じていたが、江戸勤番のさいに川本幸民に師事する。周弼が医学所において「翻譯」する『家庭百科辞書』は大部の書物であり、しかも専門外の「硝石」や「銅之類」に関する項目の翻訳は容易ではない。そのうえに、周弼は藩医として診療にもたずさわり、訳業が遅滞する。周弼の訳業を手助けしたいというのが上申の主旨である。

周弼は、萩藩医学校の「翻譯」の時間に『家庭百科辞書』の「硝石」や「銅之類」に関する項目を翻訳していた。硝石は黒色火薬の主原料である。銅は大砲の鑄造に利用される。周弼は、軍事科学、とりわけ火器に関する項目の翻訳にたずさわっていた。蛮書和解御用では、『家庭百科辞書』の翻訳がすすめられ、文化8(1811)年には第1巻、第2巻、第3巻、第4巻が訳了する。第3巻には、「金石土部」がふくまれていたが、訳稿を閲読することがゆるされないために、翻訳をつづけなければならない。

アヘン戦争を契機として、軍事学書の翻訳がさかんになり、蘭学は軍事学としての性格をおびることになる。広義の軍事学は、「軍事哲学」と「軍事科学」からなり、「軍事科学」は自然科学と社会科学の側面をもつ<sup>86)</sup>。「軍事科学」の自然科学的側面は、軍事工学、軍事医学などからなる。軍事工学は、軍事に関連する兵器などについての応用的な分野であり、兵器学、軍事土木学などがふくまれる。まず、兵器学は「兵器の理論・構造・製法などを研究する学問」(『広辞苑』第6版)である。つぎに、軍事土木学は、築城や要塞などの軍事施設の構造や防護などについて研究する学問である。軍事医学は、軍陣医学とも呼ばれ、「軍隊の保健・衛生、戦傷病の診療、防疫などを研究する」(『広辞苑』第6版)学問である。「軍事科学」の社会科学的側面は、「軍事力の建設・維持・育成を対象とした部門」、「軍事力の運用(戦略・戦術)を対象とした部門」、「リーダーシップ(右の二者にかかわる)部門」である。

能美洞庵と坪井信道が周弼を萩藩医に登庸するよう推挙したのは、萩藩に西洋医学を移植するためである。村田清風が周弼を萩藩医に登庸したのは、「異賊防禦」、すなわち海防策を具体化するためである<sup>87)</sup>。萩藩では、文化14(1817)年に村田清風の進言により、火砲を中心とした神器陣が編成される。神器陣は、天山流砲術を基本とする萩藩独自の陣形であり、「車臺に大筒を中心として左右に十匁筒三四十を備へ刀鎗の數隊を其後に配置し大筒小筒交々亂射して敵兵の色稍動くを機とし刀鎗の諸隊は硝煙濛々の間より突然出現して敵兵を撃つもの」である<sup>88)</sup>。天保11(1840)年8月、地江戸両仕組掛の清風は神器陣用掛を兼務することになり、藩主慶親に講武意見を上書し、「行先、海寇不慮之變も可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之哉、万事を御差置、先講武之一条、無<sub>レ</sub>怠様被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候」と家臣団による銃陣の大演習を実施するよう提言する<sup>89)</sup>。このころ、周弼がとりくんでいたのは兵器学である。この建言にもとづき、翌天保14(1843)年4月の萩城東方の羽賀台において「海寇防禦之御手当操練」<sup>90)</sup>が実施される。この大操練では、従来の神器陣が廃止され、西洋銃陣が採用される。

天保11(1840)年6月、長崎に入港したオランダ船がアヘン戦争の第一報をつたえる。それは、1839年11月(天保10年9月)、イギリス軍艦2隻と清国兵船29隻が広州の珠江河口の川鼻<sup>せんび</sup>で交戦し、清国兵船が壊滅的な被害をうけたというものである。翌1840(天保11)年12月に来航した清国船の「唐船風説書」<sup>からふねふうせつがき</sup>は、イギリス艦隊により定海県が占領され、多数の清国兵が死傷したことをつたえる。1842年8月(天保13年7月)、清国はイギリスの軍事力に屈服し、南京条約をむすぶ。さらに、清は1844年7月(天保15年5月)にアメリカとのあいだに望厦<sup>ぼうか</sup>条約を、同年10月(天保15年9月)にフランスとのあいだに黄埔<sup>こうほ</sup>条約を締結する。いずれも南京条約に準じた不平等条約である。

天保15(1844)年9月には、1844年2月15日付の将軍にあてたオランダ国王ウィレム(Willem)二世からの国書<sup>91)</sup>がとどけられる。国書は、日本をとりまく世界の情勢について報告したうえで、鎖国政策について再検討するようもとめるものである。世界情勢については、第1に「支那國帝王」が「歐羅巴洲<sup>エウロツバ</sup>の兵学于長ぜるに辟易し終に英吉利国と和親を約せる」こと、第2に「今を距る事三十年前欧羅巴の大乱治平せし」こと、第3に「古賢の教を奉ずる帝王ハ□民の為に多く商賣の道を開きて民養殖」したことをつたえる。ヨーロッパでは、フランス革命で頭角をあらわしたナポレオン(Napoléon Bonaparte)の侵略戦争がおわり、平和がおとずれる。イギリスをはじめとする資本主義国家の蒸気船が貿易のために世界の海洋をかけめぐる。ついで、国書は「日本海に異国船の漂ひ浮ぶ事、前よりも多くなり行て、是の為に貴船兵と貴国の民と忽ち開き、終には兵乱を起すに至らん」と警告する。天保13(1842)年7月23日、すなわち南京条約がむすばれた1842年8月28日、幕府は異国船無二念打払令をあらため、薪水給与令を發布する。薪水給与令は、「難風に逢ひ」、また「食物薪水に乏しく」、日本沿岸に漂着する異国船にたいする対応策については明示するが、使節が来航したばあいの対応策はみられない。使節がのりこんだ異国船を排斥するようなことがあれば、「必争論を開かん。凡争論は兵乱を起し兵乱ハ荒廢を招く」。「兵乱の前に荒廢せさらしめんと欲セバ、異国人を厳禁する法を弛め玉ふへし」。国書は、「平和ハ懇に好ミを通するに在り愛好を通するハ交易に在り」として、オランダ以外の諸国とも国交をむすぶよう勧告する。

「唐船風説書」、「オランダ風説書」がつたえるアヘン戦争に関する情報は、幕府が独占し、諸大名につたえられることはなかった。しかし、長崎聞役からアヘン戦争に関する情報がつたえられたのであろう。天保14(1843)年、清風は「去年廣東之戦争西洋人之賊心ニ而ハ海國之御手當之事ハ片時も難<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>差置<sub>レ</sub>事ニ相見候」として、「海寇防禦之御手當操練」を実施するよう建言する<sup>92)</sup>。日本では、清国は世界屈指の強大国とみなされていたが、「西洋人之賊心」、すなわち帝国主義的な侵略により領土を蚕食され、半植民地化の道をたどる。しかも、資本主義の最先進国であり、世界第一の貿易国であるイギリスがひきおこした隣国への侵略

戦争である。イギリスは、当時、「海上ノ戦鬪ニ於テ、西洋諸州之ニ抗衡スル者甚タ寡シ」<sup>93)</sup>といわれる世界最大の海軍国家でもある。

萩藩は、もはや藩医の周弼だけに「異賊防禦」の対応策をゆだねることはゆるされない。萩藩は、「異賊防禦」のために持駒を総動員しなければならない。坪井信道は、いわゆる囑託医として萩藩士の診療にあたっていたが、天保13(1842)年4月28日付で正式に萩藩医に任用される。その間の経緯について、信道はつぎのように述べている<sup>94)</sup>。

去月廿八日長州家へ被<sub>レ</sub>召抱<sub>レ</sub>、百五十石被<sub>レ</sub>宛行<sub>レ</sub>候。尤先年以來二三之諸侯より沙汰も有<sub>レ</sub>之候へ共、何も当直或ハ国供等有<sub>レ</sub>之趣ニ付、皆々相断申候処、今般長州家ニ於而ハ、病用之外、平生ハ定タル当番ニも不<sub>レ</sub>及、国許へ被<sub>レ</sub>召連<sub>レ</sub>候事も無<sub>レ</sub>之、其他総而世間治療之妨ニ相成候無益之事ハ、一切被<sub>レ</sub>差免<sub>レ</sub>候旨ニ御座候間、一ハ子孫之為メ、一ハ自己安心之為承諾仕候

諸藩は、オランダ語に精通する蘭学者を召し抱えるために鎬をけずっていた。信道も、いくつかの藩から藩医として仕官するよう打診される。しかし、それらは国元での勤務をもとめるものであり、信道は居宅にひらいた病院とふたつの家塾を放棄しなければならない。萩藩が提示したのは、江戸定府として藩邸外居住をみとめるという条件である。江戸深川の病院兼医学校を拠点とした活動が制約をうけることはない。農民の出である信道は、藩主の御側医をつとめる能美洞庵の「育」となり、正式に萩藩医になる。信道は、天保15(1844)年、萩藩の内用掛に任じられ、「右蘭学心得候ニ付、異賊防禦之御手當ニ可<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>廉、被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候事」と命じられる<sup>95)</sup>。弘化2(1845)年6月、信道は海上砲術書の訳書を江戸の藩政府に提出する。訳書進呈の経緯は、江戸方から国元の藩政府にあてた10月25日付のつぎの通牒から窺い知れる<sup>96)</sup>。

坪井信道<sub>ハ</sub>此度献上に相成候「ゼーアルチルレリー」と申書は、船軍之事相記し、猶焰硝及大砲等之製造も有<sub>レ</sub>之、實ニ當時海防之御裨益相成者ニ奉<sub>レ</sub>存候、昨年公儀<sub>ハ</sub>天司臺ニ於て、通詞其外出役之藩醫五六輩ニ被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>、一昨年翻譯荒増相調、校正之上、公儀へ差出候、別ニ御老中様へ一本宛相納候、然處一昨年御老中様へ差出候分ハ「ロールハルデン」及ひ「アーンハル」兩条不足仕候、此兩条ハ書中ニて別而難讀候付、跡と廻し候と申事ニ御座候、漸々昨年ニ兩条出来いたし、則全本ニ相成、差出候、併此全本ハ公儀へ一部納り候のみにて、御老中様へハ右之欠本差出候計ニ御座候、此度信道眞田公御在職之節、相納よし承り、眞田公家来ニ知己之人有<sub>レ</sub>之、色々配慮を以、屋敷ニ而寫させ候處、是も右兩条之翻譯無<sub>レ</sub>之ニ付、「ゼーアルチルレリー」之原書を□方ニ而急ニ寫させ、杉田成卿と申仁へ再譯相頼、全本ニ致し、献上仕候、申上候通公儀全本一部御老中様へ欠本一部宛有<sub>レ</sub>之、世上ニ未タ少しも傳不<sub>レ</sub>仕、此一条ハ信道不容易心配仕候

信道が「船軍之事相記し、猶焰硝及大砲等之製造も有之、實ニ當時海防之御裨益相成者ニ奉<sub>レ</sub>存候」として献上したのは、オランダ海軍軍人カルテン (J. N. Calten) が1832年に刊行した「ゼーアルチルレリー」(Leidraad bij het onderrigt de zee-artillerie) の訳稿である。アヘン戦争の勃発の報に接した幕府の命により、杉田立卿、箕作阮甫、宇田川榕庵などの幕府天文台訳員が原著の翻訳にあたる。幕府と老中に『海上砲術全書』と題する訳稿が献上されるが、のちに難解な部分の訳稿がくわえられ、完訳1部が幕府におさめられる。信道がそれを聞き知り、翻訳にたずさわった門生の杉田立卿に再訳を依頼し、完訳1部を入手する。早稲田大学図書館洋学文庫には、『海上砲術全書』が所蔵される。第2篇巻2の裏表紙に「天保癸卯六月廿一日杉田信校了／同二日／先生江上ル」と朱書される<sup>97)</sup>。杉田立卿が天保14(1843)年6月に校了し、旧師である信道に進上したことがあきらかである。「同二日」とは、翌7月2日のことであろうか。信道は、幕末期の「最大の砲術書」<sup>98)</sup>である『海上砲術全書』を萩藩に献上する。しかし、幕府が完訳1部、老中が欠本1部を秘蔵するだけで、訳稿の存在すら知られていない。信道は、内密に訳稿を入手し、しかも萩藩にそれを呈上したことが露呈しないように配慮するよう念をおす。

弘化2(1845)年には、周弼の実弟である研蔵も内用掛に任命され、「右蘭学心得侯ニ付、異賊防禦ニ付、御為ニ可<sub>レ</sub>相成<sub>レ</sub>廉見聞候ハ、坪井信道申合、内々申出候様被<sub>レ</sub>仰付<sub>レ</sub>候事」と命じられる<sup>99)</sup>。研蔵は、文化12(1815)年に生まれ、周弼より12歳年下である。天保2(1831)年4月に咸宜園に入門し、漢学をまなぶ。天保8(1837)年には周弼にしたがい、長崎に遊学する。その後も故郷の周弼のもとでオランダ語を習得し、西洋医学をまなぶ。天保14(1843)年に江戸におもむき、伊東玄朴の象先堂に寄寓する。

江戸遊学中の研蔵については、「西学は当時若手之内海内ニ指折之由ニ御座候」といわれる<sup>100)</sup>。研蔵の在塾中の弘化2(1845)年ころ、佐賀藩侍医の伊東玄朴は、佐賀藩から「防禦の儀に付御為に相成候廉見聞候はゞ申出候様」命じられ、「御爲筋」を復命していた<sup>101)</sup>。当時、佐賀藩や鹿児島藩は有能な蘭学者を発掘し、家臣団にくわえようと躍起になっていた。萩藩も同様である。研蔵は、坪井塾にも出入りし、兄周弼の旧師である信道に接する機会もすくなくなかった。信道は、研蔵のオランダ語解読の能力をみきわめ、萩藩に研蔵を推挙したとおもわれる。弘化2(1845)年4月、信道と研蔵はあらためて「博く外國の書を讀み防備等の事に關して獻替する」よう命じられる<sup>102)</sup>。研蔵は、同年10月、藩命により萩にもどり、翌弘化3(1846)年1月には「外國及諸藩の情勢調査」のために長崎におもむく<sup>103)</sup>。

萩藩で唯一の蘭学者の供給源である周弼は、当時の慣行として盟友の緒方洪庵の適塾に門生をあずけ、洪庵の門生をうけいれていた。しかし、弘化期から嘉永期にかけて、東条英庵(弘化2年入門)、田原玄周(弘化3年入門)、田上宇平太(弘化4年9月入門)、烏田敬蔵(嘉永6年5月入門)といった萩藩遊学生が入門したのは、佐賀藩医の伊東玄朴がいとなむ象先

堂である。

佐賀藩は、福岡藩と交代で長崎警備の任にあたっていたが、文政5(1808)年8月15日、イギリス軍艦フェートン号が長崎港に侵入し、人質をとり、食糧や薪水を要求する。長崎警護の当番であった佐賀藩では、藩士が処分され、藩主鍋島齊直も逼塞の処分をうける。天保元(1830)年に齊直のあとをついだ直正(閑叟)は、汚名を挽回するために、藩政改革を断行し、その一環として軍事力の強化、すなわち西洋軍事学の導入にとりくむ。直正は、天保2(1831)年に江戸で蘭学者として名高い佐賀藩領の地下医の出である玄朴を「閑叟の洋学顧問」<sup>104)</sup>として藩医にとりたてる。天保5(1834)年に医学館を創設し、嘉永4(1851)年には医学館内に蘭学寮を併設する。江戸在住の玄朴は、「常に蘭書に依て識見を擴めん事に努」め、「單に醫藥治療の爲のみに非ず、藩公の内命に依て毎に蘭書を帶出し塾生知友と力を協せ翻譯校合し公に上る事屢々」<sup>105)</sup>であった。研藏の在塾中の弘化2(1845)年ころには藩命により「御爲筋」を復命していた。象先堂の扁額をかけた天保4(1833)年から玄朴が没した明治3(1870)年までの入門生をしるした「門人姓名録」によれば、総計406名、出身地は全国61カ国におよぶ<sup>106)</sup>。そのなかには、おおくの佐賀藩士もふくまれ、帰藩後、藩の軍事産業に従事する。そのひとりである杉谷雍介は、象先堂在塾中に玄朴や門生の協力により、オランダ人ヒュグューニン(Ulrich Huguenin)があらわした西洋鉄銃鑄造書『ロイク国立鉄製大砲鑄造所における鑄造法』(Het Gietwezen ins Rijks Ijzer-Geschutgieterij te Luik)の翻訳に着手する<sup>107)</sup>。帰藩後、嘉永3(1850)年に訳了し、『煩鉄全書』と題し、版行する。同年6月、鉄製銃砲局が設置され、雍介は大銃製造方として鑄鉄砲の生産にたずさわる<sup>108)</sup>。

萩藩遊学生が象先堂をえらんだ理由はふたつに集約される。研藏のばあいには、つぎのような理由であろう<sup>109)</sup>。

舶載の蘭書は悉く是を購ひ其價の貴きを問はず、醫學書理學書兵書を始めとし文學歴史地理法律の書に及び珍藏する處其數を知らず、蘭學を學ぶ者單に玄朴の藏書を見んとして其門に入る者あるに到る、加之幕府奧醫師となるや、幕府の藏書も亦涉獵して餘さず。

研藏は、兄周弼のもとで修業し、天保13(1842)年には長崎にあそぶ。萩にかえったとしても目新しい原書もない。翌天保14(1843)年に江戸におもむいたのは、蘭学を中心である江戸で未知の蘭書を閲読し、蘭学者と交遊するためである。象先堂に寄寓しながら、坪井塾にも出入りし、門生などとも交遊する。堀内忠寛、黒川良安とともに坪井塾に架蔵されていたフランス人外科医リシュラン(Anthelme Balthasar Baron Richerand)の『新生理学入門』の蘭訳書(Nieuwe grondbeginselen der natuurkunde van den mensch)を訳述し、弘化元(1844)年に『医理学源』と題し、版行する。忠寛は信道の盟友であり、周弼とも親交がある。良安は、文化14(1817)年、越中国大榎木村の地下医黒川玄龍の子に生まれる。文政11(1828)年か

ら長崎に滞在し、通詞の吉雄権之助にオランダ語を、シーボルト (Philipp Franz von Siebold) に医学をまなぶ<sup>110)</sup>。天保 8 (1837) 年ころ、長崎に遊学していた周弼と緒方洪庵から江戸の坪井塾で研鑽するようすすめられ、天保 12 (1841) 年に坪井塾に入門する。周弼の長崎遊学に随従していた研蔵とは旧知の間柄である。研蔵は、忠寛、良安とともに「第二の三傑」と呼ばれる<sup>111)</sup>。

田上宇平太は、文化 14 (1817) 年、藩士高杉又兵衛の子に生まれ、藩士田上平兵衛の養子にむかえられる。高杉晋作の叔父にあたる。周弼が萩で家塾をひらいたころには、20歳をこえていたが、周弼塾に入門した形跡はない。しかし、20代の一時期、聞役として長崎に滞在していた。宇平太は、弘化 4 (1847) 年 9 月、伊東玄朴の門生になり、嘉永 4 (1851) 年 5 月までとどまる<sup>112)</sup>。宇平太は、軍事書の翻訳にたずさわり、入門 2 年後の嘉永 2 (1849) 年には「ベウセランド、アルチルレリー」、おそらくベースヘル (W. F. Beuscher) があらわした『下級士官用砲術学入門』(Handleiding, vooronderofficieren, tot de kennis der theoretische en praktische wetenschappen der artillerie)<sup>113)</sup>を訳す<sup>114)</sup>。宇平太は、象先堂に入門するまえに、オランダ語を習得していた。佐賀藩は、嘉永 3 (1850) 年、長崎沖合に洋式砲台の建設に着工するが、そのさい『下級士官用砲術学入門』が参看される<sup>115)</sup>。

東条英庵は、文化 10 (1813) 年、右田毛利の侍医東条永玄の長男に生まれ、周弼が萩に家塾をひらいた天保 11 (1840) 年に入門した最初期の門生である<sup>116)</sup>。天保 15 (1844) 年に緒方洪庵の適塾に入門するが、江戸におもむき、翌弘化 2 (1845) 年のはじめに伊東玄朴の象先堂に入門する。田原玄周は、文化 12 (1815) 年、藩医田原秀安の長男に生まれる。京都に遊学したのち、江戸におもむき、天保 12 (1841) 年 5 月に箕作阮甫の門生になる。阮甫が蕃書和解掛の仕事がいそがしくなったためか、弘化 3 (1846) 年ころには伊東玄朴塾にうつる<sup>117)</sup>。東条英庵、田原玄周は、もともと兵学志望であり、いずれも、のちに萩藩の軍事学の分野に足跡をのこす。萩藩遊学生が象先堂をえらんだもうひとつの理由は、西洋の軍事学をまなぶためである。

研蔵は、後嗣のいない周弼の養子になっていたが、弘化 4 (1847) 年 2 月、嫡子雇により毛利家家臣団にくわえられ、東条英庵、松村太伸とともに西洋書翻訳御用掛に補任される<sup>118)</sup>。西洋書翻訳御用掛は、この年、異賊防禦御手当掛の所轄になっていた。西洋医書の訳著がある研蔵は「万国風土記之内英咭喇国都府龍動之部」、太伸は「歩兵学校」の翻訳にたずさわる<sup>119)</sup>。『万国風土記』については、箕作省吾の『坤輿図識』、その養父阮甫の『八紘通誌』のような世界地理書ではないかとおもわれる。詳細はあきらかではないが、のちに周弼が『英国志』を翻刻したことを考えあわせれば、萩藩ではイギリスが仮想敵国とみなされていた。太伸については、「萩藩の一門吉敷毛利家の医玄機の子」であり、嘉永 4 (1851) 年秋に没したこと<sup>120)</sup>、『扶歇蘭度勞編』という訳述書がある<sup>121)</sup> ことしか知られていないが、太伸も周弼の門生ではないかといわれる<sup>122)</sup>。

嘉永2(1849)年1月、周弼は手廻組にくわえられ、医学館会頭役に任じられ、はじめて萩藩医学校の運営にかかわることになる。翌嘉永3(1850)年6月20日、周弼は譜代藩医にとりたてられる。その9日後、青木研蔵と田原玄周が西洋原書頭取役に任じられる。同日、萩藩医学校は濟生堂から好生館に改称し、改築のため明倫館内にうつされる。周弼は、教諭役能美洞庵のもとで、赤川玄悦とともに会頭役に任じられる。

萩藩でも、周弼のもとから蘭学者が巣立っただけでなく、江戸の当代一流の蘭学者のもとで本格的に蘭学をまなんだ蘭学者がそだちはじめる。しかも、周弼よりも10歳以上も若い世代の蘭学者である。そうした蘭学者が萩藩に結集しはじめる。周弼は、オランダ語を習得し、蘭書を繙読することができたために、「異賊防禦」の職務にたずさわることになるが、坪井信道塾で修業をつんだ臨床医にすぎない。萩藩に縁故がある蘭学者のなかから、「異賊防禦」の職務、すなわち西洋軍事学に専門的にたずさわるものがあらわれはじめると、周弼にはあたらしい局面がひらかれる。

#### おわりに

本稿は、西洋医として萩藩ではじめての藩内居住の藩医に登用された青木周弼が、萩藩において、どのような蘭学の移植基盤をととのえたかあきらかにすることを課題とした。

周弼は、緒方洪庵、川本幸民とならび、「信道門下の三哲」<sup>123)</sup>と尊称される。周弼が藩医に登用されたのは、萩藩に西洋医学を導入しようと企図する能美洞庵、西洋医学の師として周弼の後來を気づかう坪井信道、萩藩の天保改革を主導し、萩藩に西洋軍事学を導入しようとする村田清風、それぞれの思惑が合致したためである。萩藩では、周弼の藩医登用を契機として、医学校創設の気運がたかまり、天保11(1840)年9月に漢方医書と西洋医訳書の会読がはじまる。周弼は、会読用の西洋医訳書の選択をゆだねられ、みずから翻譯掛として原書の会読や訳書の会読にたずさわる。しかし、萩藩医学校の運営にかかわることはなかった。それは、天保改革が本格化する過程で、あいついでアヘン戦争の報がつたえられ、海防問題が喫緊の課題として改革の一環にくみこまれたからである。周弼が原書会読の時間に翻譯にたずさわったのは、西洋医書ではなく、「蘭書シヨメール」、すなわち『家庭百科辞書』の「硝石」や「銅之類」に関する項目である。硝石は黒色火薬の主原料である。銅は大砲の鑄造に利用される。周弼は、軍事学、とりわけ兵器に関する項目の翻譯にたずさわる。

萩藩領では、シーボルトに師事し、オランダ語論文を作成した杉山宗立<sup>そりりゆう</sup>、井本文恭<sup>ぶんききょう</sup>が私的に原書の会読をおこなった可能性がある。しかし、萩藩医学校という公的な機関で原書会読をおこなったのは、周弼がはじめてである。周弼の原書会読は、オランダ語を習得しようとする、周弼の家塾生しか参加することができない特殊なものである。しかも、会読用書は西洋医書ではなく、西洋軍事学に属する兵器学に関するものである。萩藩は、幕府が日米和

親条約批准書を交換した安政 2 (1855) 年の 9 月に萩藩医学校内に「台場築造、砲術、諸器械、其外洋製便利之事柄」を研究する西洋学所を開設する<sup>124)</sup>。医学校と西洋学所は、空間という点だけでなく、教育課程という点でも渾然としていたために、安政 4 (1857) 年 5 月には「兵學を而已第一とし、醫學を相拒ミ」といった風潮が顕著になる<sup>125)</sup>。攘夷論を主唱する萩藩において、医師のなかに軍事学を志望し、医学研究を忌避するものがあらわれたのは、むしろ自然のなりゆきである。蘭学が医学から軍事学へと変容する萌芽は、周弼が萩藩における蘭学の移植基盤をととのえる段階において胚胎していた。

【註】

- 1) 日野宗春談，伊内左助速記，「日野宗春翁雜談」，山口県文書館所蔵。
- 2) 同上。
- 3) 岡原義二，『青木周弼』，青木周弼先生顕彰会，昭和16年（大空社，1994年復刻），111～113頁。訓点筆者。
- 4) 日野宗春撰写，「青木周弼略傳」，山口県文書館。訓点筆者。
- 5) 石田純郎，『緒方洪庵の蘭学』，思文閣出版，1992年，36～37頁。
- 6) 酒井シヅ，「蘭館長ニーマンと長崎留学生」，『日本医史学雑誌』第21巻第1号，昭和50年1月，16～17頁。
- 7) 緒方富雄，『緒方洪庵伝』，岩波書店，昭和17年，28頁。
- 8) 緒方洪庵，青木周弼，岡海蔵訳，卷之一～三，書写年不明，一部蘭栄亭蔵用箋使用。
- 9) 和蘭布辣危輯，緒方章浩葦・青木彦周弼・岡樸海蔵譯，上・中・下巻，書写年不明。
- 10) 緒方洪庵，青木周弼，岡海蔵訳，乾・坤巻，書写年不明。
- 11) 『青木周弼』，104頁。
- 12) 田中助一，『防長医学史』下巻，防長医学史刊行後援会，昭和28年（聚海書林，昭和59年復刻），282～284頁。
- 13) 石川卓美編，『山口県近世史研究要覧』，マツノ書店，昭和51年，129頁。
- 14) 『防長医学史』下巻，185～194頁。
- 15) 青木一郎編著，『坪井信道詩文及書翰集』第一部，岐阜県医師会，昭和50年，305～308頁。
- 16) 田中助一，『防長医学史』上巻，防長医学史刊行後援会，昭和28年（聚海書林，昭和59年復刻），182頁。
- 17) 今村亮編，『洋方医伝』，明治17年（青史社，1980年復刻），38～40頁。
- 18) 林子平述，『校正海国兵談』卷之一，嘉永6（1853）年序，出版者不明，出版地不明，早稲田大学図書館所蔵。
- 19) 「少壯之面々え御談し書」，「戊（嘉永三年）十一月十日」，山口県教育会編刊，『村田清風全集』上巻，昭和36年（マツノ書店，昭和60年復刻），343頁。
- 20) 『山口県近世史研究要覧』，88頁。
- 21) 文部省，『日本教育史資料』九，富山房，明治23年（鳳文書館，昭和63年復刻），177頁。
- 22) 『青木周弼』，125頁。
- 23) 『青木周弼』，120～121頁。
- 24) 篠崎弼（小竹）書，「斎藤方策墓誌」，書写年不明，早稲田大学図書館所蔵。
- 25) 『防長医学史』下巻，209頁。
- 26) 斎藤方策・中環中訳，『把而翁湮解剖図譜』下編，文政壬午秋（文政五年）小石龍序，思思斎蔵，出版地不明，早稲田大学図書館所蔵。
- 27) 『防長医学史』下巻，213頁。
- 28) 『青木周弼』，79～83頁。

- 29) 『防長医学史』上巻, 230～231頁。
- 30) 『山口県近世史研究要覧』, 90頁。
- 31) 同上書, 112頁。
- 32) 『青木周弼』, 122～123頁。
- 33) 「醫業成立沙汰控」, 山口県文書館所蔵。
- 34) 『防長医学史』下巻, 262～268頁。
- 35) 「演説覺」, 「醫業成立沙汰控」。
- 36) 岡田悟, 「萩城下の南苑御茶屋, 後の八丁御殿について」, 『日本建築学会計画系論文集』第561号, 2002年11月, 239頁。
- 37) 「醫業成立沙汰控」。
- 38) 同上。
- 39) 茂住実男, 「会談について」, 『大倉山論集』第3輯, 平成5年12月, 100頁。
- 40) 「徂徠先生答問書」下, 島田虔次編, 『荻生徂徠全集』第1巻, みすず書房, 1973年, 468頁。
- 41) 「会談について」, 100頁。
- 42) 「醫業成立沙汰控」。
- 43) 『防長医学史』下巻, 397～398頁。
- 44) 同上書, 106～107頁。
- 45) 同上書, 254～256頁。
- 46) 同上書, 255頁。
- 47) Allgemeine Deutsche Biographie.
- 48) (独) 昆斯骨夫著・(蘭) 越面宝幾訳・伊藤玄朴(冲齐)重訳, 『医療正始』24巻, 附載書・合綴書: 附 医院類案, 天保6～弘化4年, 3冊。
- 49) 蘭学資料研究会編, 『箕作阮甫の研究』, 思文閣出版, 昭和53年, 271頁。
- 50) 杉田玄白, 杉田玄端・杉田廉卿序, 『蘭学事始』下之巻, 明治2年, 天真楼, 早稲田大学図書館所蔵。
- 51) 『箕作阮甫の研究』, 272頁。
- 52) 同上書, 279頁。
- 53) 「箕作阮甫と『外科必読』」, 大鳥蘭三郎, 『医学書誌論考』, 思文閣出版, 昭和62年, 204頁。
- 54) 同上, 204頁。
- 55) 大鳥蘭三郎, 「外科必読」, 日蘭学会編, 『洋学史事典』, 雄松堂出版, 昭和59年, 248頁。
- 56) 『箕作阮甫の研究』, 288頁。
- 57) 『緒方洪庵の蘭学』, 253～255頁。
- 58) 石田純郎, 『オランダにおける蘭学医書の形成』, 思文閣出版, 2007年, 185頁。
- 59) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』上, 岩波書店, 1977年, 543頁。
- 60) 「序」, 不冷吉撰, 不路乙斯重訂, 杉田立卿訳述, 『眼科新書』巻之一, 文化12(1815)～13年, 群玉堂(心齋橋筋博労町), 早稲田大学図書館所蔵。訓点筆者。
- 61) 富士川游, 『日本医学史』, 日新書院, 昭和16年, 553～554頁。
- 62) 川喜田愛郎, 『近代医学の史的基盤』下, 岩波書店, 1977年, 629頁。
- 63) 『日本医学史』, 162～163頁。
- 64) 『緒方洪庵の蘭学』, 191頁。
- 65) 「増補重訂内科撰要凡例」, (蘭) 我爾徳児著, 宇田川玄随訳, 宇田川玄真校註, 藤井方亭増訳, 『増補重訂内科撰要』18巻(18冊), 文政5(1822)年宇田川玄真凡例, 京都大学附属図書館富士川文庫所蔵。
- 66) 富士川游, 『日本医学史』, 日新書院, 昭和16年, 543頁。
- 67) 『蘭学事始』下之巻。
- 68) 杉本つとむ, 『江戸の阿蘭陀流医師』, 早稲田大学出版部, 2004年, 127頁。
- 69) 「醫業成立沙汰控」。
- 70) 安藤紀一編, 「萩好生館事略」, 昭和2年, 手稿本, 山口県文書館所蔵。
- 71) 「醫業成立沙汰控」。
- 72) 「西洋学御引立一件沙汰控」。

- 73) 『青木周弼』, 152頁。
- 74) 石田純郎, 『蘭学の背景』, 思文閣出版, 1988年, 232頁。
- 75) 「醫業成立沙汰控」。
- 76) 『蘭学の背景』, 227頁。
- 77) 「凡例」, 宇田川玄真, 宇田川榕庵校補, 『遠西医方名物考』 卷之一, 文政5(1822)年榕庵序, 風雲堂蔵版, 青藜閣(江戸浅草茅町) 発兌, 早稲田大学図書館所蔵。
- 78) 『蘭学の背景』, 227頁。
- 79) 「凡例」, 青地林宗述, 篠田元順校, 瑪蜂臨写, 『氣海觀瀾』, 文政10(1827)年序, 芳澗園, 早稲田大学図書館所蔵。
- 80) 『青木周弼』, 122頁。
- 81) 「好生堂増補御規則」, 「部寄」文久元年, 山口県文書館所蔵。
- 82) 「日野宗春翁雜談」。
- 83) 「西洋学御引立一件沙汰控」。
- 84) 同上。訓点筆者。
- 85) 『防長医学史』 下卷, 9~10頁。
- 86) 防衛大学校・防衛学研究会編, 『軍事学入門』, かや書房, 1999年, 14~15頁。
- 87) 山口県文書館毛利家文庫には, 「異賊防禦」に関する文書が多く所蔵される。なかでも「異賊防禦御手当一事」は8冊からなり, 天保13(1842)年から嘉永5(1852)年までの異賊防禦に関する幕令, 長州藩の準備状況, 異船漂着先例の調査, 坪井信道, 青木周弼などへの洋書研究命令など広範な内容をふくむ。
- 88) 末松謙澄, 『修訂防長回天史』 第一編, 末松晴彦, 大正10年修訂再版(明治44年初版, マツノ書店, 平成3年復刻), 147~148頁。
- 89) 「御講武一件上書」, 『村田清風全集』 上卷, 208頁。訓点筆者。
- 90) 「大操練意見」, 『村田清風全集』 下卷, 23頁。
- 91) 洪川六蔵訳, 「和蘭国王書簡并献上物目録和解」, 「紅毛告密」, 書写年不明, 早稲田大学図書館所蔵。
- 92) 「大操練意見」, 山口県教育会編刊, 『村田清風全集』 下卷, 昭和38年, 23頁。
- 93) 「大貌利太泥亞」, 箕作省吾, 『坤輿図識』 卷之二, 弘化4(1847)年, 須原屋伊八, 早稲田大学図書館所蔵。
- 94) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化3(1846)年閏5月28日付, 山本四郎, 「坪井信道と小石元瑞」, 『蘭学資料研究会研究報告』 第46号, 1959年4月, 62頁。
- 95) 「異賊防禦御手当一事」。訓点筆者。
- 96) 同上。
- 97) 宇田川榕菴訳, 杉田成卿校, 『海上炮術全書』 第二編, 天保14(1843)年写(自筆)。斜線部は改行部分。
- 98) 吉田忠, 「物理学・弾道学・化学」, 中山茂編, 『幕末の洋学』, ミネルヴァ書房, 1984年, 163頁。
- 99) 「異賊防禦御手当一事」。
- 100) 坪井信道書翰, 小石元瑞宛, 弘化2(1845)年10月24日付, 「坪井信道と小石元瑞」, 64頁。
- 101) 『修訂防長回天史』 第一編, 344頁。
- 102) 同上書, 253頁。
- 103) 「附記」, 『青木周弼』, 649頁。
- 104) 毛利敏彦, 『幕末維新と佐賀藩』, 中央公論新社, 2008年, 24頁。
- 105) 伊東栄, 『伊東玄朴傳』, 玄文社, 大正5年(昭和153年復刻, 八潮書店), 141~142頁。
- 106) 海原徹, 『近世私塾の研究』, 249~251頁。
- 107) 飯田賢一, 「近代製鉄技術史上の西南雄藩とヒュゲニン原著『鉄砲全書』について」, 西南諸藩洋学史研究会編刊, 『西南諸藩の洋学』, 1985年, 136頁。
- 108) 秀島成忠編, 『佐賀藩鉄砲沿革史』, 肥前史談会, 昭和9年(原書房, 昭和47年復刻), 144頁。
- 109) 『伊東玄朴傳』, 134~135頁。
- 110) 尾佐竹猛, 「黒川良安の事蹟に就て」, 『中外医事新報』 第1269号, 昭和14年7月, 266頁。
- 111) 「日野宗春翁雜談」。

- 112) 『青木周弼』, 361頁。
- 113) 佐藤昌介, 「国際的環境と洋学の軍事科学化」, 中山茂編, 『幕末の洋学』, ミネルヴァ書房, 1984年, 21頁。
- 114) 沼倉研史・沼倉満帆, 「長州藩蘭学者田上宇平太と翻訳砲術書」, 『英学史研究』第20巻, 1987年, 62頁。
- 115) 『伊東玄朴傳』, 143頁。
- 116) 「東条英庵」, 原平三, 『幕末洋学史の研究』, 小見壽, 1992年(2001年復刻), 338頁。
- 117) 『防長医学史』下巻, 382~391頁。
- 118) 「西洋学御引立一件沙汰控」。
- 119) 「文武御興隆沙汰控」, 山口県文書館所蔵。
- 120) 吉田祥朔, 『増補近世防長人名辞典』, 昭和51年, マツノ書店, 219頁。
- 121) 「第2回名古屋大学博物館企画展記録 フーフェラントと幕末の蘭方医——毛利孝一コレクションから」, 『名古屋大学博物館報告』第19号, 2003年12月, 158頁。
- 122) 『防長医学史』下巻, 394頁。
- 123) 小沢清躬, 『蘭学者川本幸民』, 川本幸民顕彰会, 昭和23年, 16~17頁。
- 124) 「好生堂醫學引痘沙汰控」, 山口県文書館所蔵。
- 125) 「明倫館洋学医学兵器船艦火薬事材料抜写」二, 山口県文書館所蔵。

## Zusammenfassung

### Ein Lehrer für Übersetzung der Medizinschule des Hagi-Klans Shūsuke Aoki

MORIKAWA Jun

Im Jahre 1839 wurde Shūsuke Aoki, ein Sohn eines Dorfsarztes, als einen Daimyatsarzt in Hagi angestellt. Anfangs mußte er sich mit der Übersetzung der holländischen Bücher über die westlichen Militärwissenschaften in seinem Unterricht der medizinischen Schule beschäftigen, um die Invasion der Abendländer zurückzudrängen. Shūsuke führte als der erster westliche Mediziner die Holland-Wissenschaft in den Hagi-Klan ein. In dieser Studie möchte ich aufklären, welche Grundlage der Holland-Wissenschaft bildete er im Hagi-Klan?